
傭兵先生

五月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

傭兵先生

【Nコード】

N4566N

【作者名】

五月

【あらすじ】

現役傭兵の難依^{ない}はお風呂を借りる代わりに、陽耀国の国立魔法学校 通称ようがく で働くことになりました。「は？聞いてないぞ」「だって難依君、お風呂入ったよな」 主人公最強系です。苦手な方は戻るをクリック 不定期更新 用語集を勝手ながら削除させていただきます

00: prologue

「っだあ！めんどくせえ！後何匹残ってんだ！？」

「玲愛さん頑張って下さい！今見えてるので最後です！」

「見えてるのって……何百匹いんだよこれえ！そろそろ心折れるぞ……！」

「うるさいぞ玲愛！弱音吐いてる暇があったら目の前の魔物ぶった切つてろ……！」

「だああああああ！わあったよ、雛依……！由良！頼む……！」

「はい！【その脚は風よりも早くその眼は千里を見通すその腕は力強くその身体は鋼鉄のように硬い】……！」

「よっしゃ！ありがとよ、由良！ちよっくら行つてくらあ……！」

「気を付けて！」

目の前に広がる魔物達の群れは大きく、まるで一つの生き物のように蠢いている。

ハッキリ言つて気持ち悪い。

この集団に突っ込んでいった玲愛に関心しながら、目の前に飛び出て来た魔物を狩る。そろそろ魔物の血や体液で使い物にならなくなってきた刀を強く握ると一歩前に踏み込み、薙ぎ払う。

その剣圧によつて魔物が一度に5、6匹吹き飛んだ。

「雛依さん……！」

「ん？どうした？由良」

「あ、あの、玲愛さんにはああ言いましたけど・・・本当に大丈夫なんでしょうか？」

「お前がそれを言っちゃあ、おしまいだろ」

「！そう、ですね・・・【絶対大丈夫】ですよね！！」

「ああ。ぜつつつつつたい大丈夫だ！俺達に任せとけ」

「はいっ」

由良は言霊を操る一族の生まれで、肩の少し下まで伸びた青い髪と、優しい青い瞳がその証だった。

そして今、その少女から【絶対大丈夫】という言葉霊が発せられた。だったら・・・俺達は絶対大丈夫だ。

「雛依さん【絶対に大丈夫 絶対に皆無事でこの騒動は解決します】」

青い瞳に強い決意の輝きを見て、俺はにっと笑った。

「よく言った！」

由良の言霊によって身体が軽くなったことを感じながら、玲愛の後に続くように魔物の群れに飛び込んでいった。

「ははは・・・お互いぼろぼろだなあ、ない難依君」

「ああ・・・それにしても、一国の王が酷い有様だな」

ない難依と話しているのは、この討伐部隊の支援者であり、実際に戦場に出て魔法を振るうというお転婆（？）はるか振りを發揮する、人間族の代表であり陽耀国ようようこくの王である陽佳だ。

いつも身に着けている煌びやかな服を脱ぎ去り、そろらの傭兵が着ているようなボロを身に纏っている。といっても、その服の頑丈さは非常に高く、三下が振るうような剣では傷一つ付けることはできないだろう。

「いーの、いーの。たまには発散しないと」

「発散ってレベルじゃないけどな」

全身に傷を負いながら、それでも2人の表情は明るい。

「それにしても、ない難依君さあ」

「あ？」

「その髪、邪魔じゃない？」

「んゝあゝまあ、こういう時はちよつと邪魔だとは思っけど」
「伸ばしてる事に何か意味でもあるのかい？」

儼依ないの髪は長い。いつも首元で一つに結んでいるが、その長さは腰にまで及んでいる。儼依ないが首を傾げるのに合わせて、黒い髪が揺れた。

「いや、あるっちゃあるが、ないっちゃない……………」
これが終わったら思い切って切ってみるか」

「おーおー、そうしろ、そうしろ！切ったら一度顔見せに来なよ」

「気が向いたらな」

「くくく・・俺の頼みをこんなにあつさり流すのは、君くらいだよ」
「そりやどーも」

こんな呑気な会話をしているが、未だに魔物の勢いは衰えておらず、他の仲間たちは応戦中である。

では、何故この2人が戦場から少し離れた場所でのんびりしているかというと、

- 1・儼依ないの刀が使い物にならなくなってしまったため
- 2・後ろから全体の様子を確認するため
- 4・皆が区切りをつけて戻ってくるのを待つため
- 3・魔物達に、とっておきの魔法をぶつけてやるため

ぞくぞくと戻ってくる仲間たちを迎えながら、儼依ないと陽佳はるかは魔力を溜めていく。

最後の最後に玲愛れおが戻ると、2人は5歩ほど前に進み出る。

「さあ、これで終わりだ」

「風呂入りたい」

「唐突だなあ。これが終わったらいくらでも入れるだろう？なんなら俺のを貸してあげようか？」

「よし！言っただな。約束守れよ。お前のトコの王宮だけあって広いもんなあ」

「良いよ。その代わり^{ない}儼依君も俺の言う事1つ聞いてくれよ」

「1つだけな」

「交渉成立だ。………さあ、^{ない}儼依君をお風呂に入れてやる為にも早くやってしまおう」

「おう。俺を早く風呂に連れてってくれ」

「赤き灼熱の使徒よ 集え集え 闇を貫く槍となれ

世界を巡る者よ 廻れ廻れ 赤に添いてその導き手となれ

母なる息吹よ 逆れ逆れ 生命の争奪者となれ

満ちたる者よ 包め包め 全てを覆い1つとなせ！」

魔物の群れ、^{ない}儼依、^{はるか}陽佳、他の討伐部隊達そして山や空が白く白く染まり

この日、陽耀国から山が1つ消えた。

01：傭兵先生誕生

「陽耀国魔術学園の教師？」

俺は濡れた髪を布で拭いながら、陽佳はるかが言った言葉を反芻した。

「は？聞いてないぞ」

「だって難依ないくん、お風呂入ったよな」

同じく濡れた髪を拭っている陽佳はるかがニコニコ笑いながらそんなことを言う。

その笑顔に黒いものを感じながら、俺はガシガシと頭を掻いた。

「………期間は？」

陽佳はるかが条件を受け入れてもらえたのだと顔を輝かせた。

「最低1年」

「ふざけんな」

俺は眉間に皺を寄せながら陽佳はるかの言葉を切り捨てる。

現役の傭兵にとって、1年も仕事を制限されるのは死活問題だ。今回の騒動でかなりの収入が入ったが、だからといって遊び呆けていたら半年ほど金が底をついてしまう。俺が所属している傭兵団には1人、笑ってしまうほどよく食べる男がいるのだ。だいたい、身体がなまる。

「給料はちゃんと払うからさ」

「……いくらだ？」

「これくらい」

ちらつと陽佳^{はるか}の指を見る。

「一年で？」

「いや。一か月で」

陽佳^{はるか}が提示した額は不定期収入の傭兵業より、はつきりいつて良い。だが、そこまでの金を払ってまで、なんでわざわざ俺なんかを雇おうとするんだ？……怪しい。

「けっこうな金額だが……何考えてんだ？」

「うん。儼依^{ない}君には教師の仕事と一緒に傭兵としての仕事も頼もうと思ってるね」

「傭兵としての仕事？」

「そうそう。今回の件でほとんどの闇魔獣を潰せたけど、逃がしたのが何匹かいただろう？」

「なるほどなあ」

ようは、学園に侵入する魔物を始末してほしいのだろう。

昨日、闇魔獣を討伐した緑壁山^{りょくへきざん}（昨日^{えい}決れて無くなった）は、ようがくから馬車で1、2時間の場所にある。逃げ出した闇魔獣が忍び込む可能性は十分にありえる。

それに相乗効果として、ほかの関係のなかった魔物達も暴れだすだろう。

「まあ、理由は分かったとして。俺が教師なんて出来ると思ってる

のか？」

「なに言ってるんだ。儼依君^{ない}の知識量物凄いじゃないか。あの知識自慢の宰相が悔しそうな顔してたぞ」

「いや、教えるうんぬんはまだ良いんだよ。経験も多少ならあるし」

「？じゃあ何が問題なんだ」

「お前・・・ようがくの生徒つつたら大半がぼんぼんだろうが。誰がまともに傭兵なんかの授業受けるかよ」

そうなのだ。ようがくは陽耀国魔術学園という名前の通り、魔力を持った者しか入学できない。

この世界には大きく分けて人間族^{にんげんぞく}、魔人族^{ましんぞく}、獣人族^{じゅうじんぞく}、精霊族^{せいれいぞく}、言の葉族^{はそく}、清良族^{きよらぞく}、綺羅族^{きりぞく}という7種類の種族に別れている。

ようがくに通っている者はその中の人間族と精霊族が大半を占め、しかも、そのほとんどが国の要職に就いている者の血縁者なのだ。魔力も高いが気位も高い。子どもだということでも手も出しにくいし。はつきり言って、なるべくなら関わり合いになりたくない。

「それなら大丈夫！儼依君^{ない}には特別学級を受け持ってもらおうから」

「は？特別学級？聞いたことないぞ、そんなクラス。それに嫌な予感しかしねえ」

「特別学級っていうのは、個人レッスンを主体とするクラスなんだ」「ちよつとまで。それ、クラスにする意味あるのか？」

「あるある。授業に極端についていけなかったり、ある1つの特技しか持ってなかったり、そもそも授業受ける気がなかったり、コミュニケーションが上手く取れなかったりする子を集めて、それぞれに合わせた授業をしていくんだよ」

「おい、こら。最初の2つはともかく、後のはただの厄介払いじゃねえか」

「そうかもね。・・・でも儼依君^{ない}、こういつの好きだろう？」

「・・・・・・まあ、否定はしない」

陽佳^{はるか}の言つとおり。俺は少しずつ“特別学級”に興味を持ち始めていた。

俺も一族の落ちこぼれ、異端者と呼ばれている。そのクラスの子ども達に勝手に親近感を持ち始めたのだ。

それが分かつているのか、陽佳^{はるか}が笑顔で話を続ける。

「教師やってる間は好きだけこのお風呂入らせてあげるから」
「やる」

最後は風呂に釣られた俺だった。

1か月後

「では、今から私達の質問に答えて頂きます」
「・・・・・・・・」

国王が依頼したこととはいえ、そう簡単に教師として受け入れられるはずがなかったのだ。

俺はようがくの教師もぼんぼんばかりだということを、すっかり忘れていた。

「この国の創造神は？」

「主神・陽螺世帷^{ユンロイ}」

教師もそれなりの権力を持っているので、国王もこいつ等の言葉を無碍^{むじく}には出来ない。

俺がようがくの教師になると聞いたときのこいつ等の反発は凄かった。

『傭兵などが、この神聖な学び舎を汚すことは許されない』だの『力しかもたない愚か者に教師など勤まらない』だの『我らに対する侮辱だ』だの

ぴーぴーと騒ぐ事、騒ぐ事。耳障りでしょうがない。

「擦り傷に効く高志岐^{タカシギ}地方特産の薬草の名は？」

「楚紫野草^{ソシノソウ}」

陽佳も難しい顔をして黙ってしまった後、予想外の人物から鶴の一声が上がった。

『では、彼が陽耀国魔術学園の教師となりえるかを調べてみましょう。わたくし達教師陣からそれぞれ100問ずつ質問をしていきます。1つも間違えることなく答える事が出来たら教師として迎えましょう』

そう言ったのはようがくの学園長の朝日^{あさひ}だった。

黒髪黒眼で整った顔を持つ、いわゆる美女に分類される彼女は、元魔術師長のエリートだ。

そういう訳で、今こうして質問攻めにされている。

この会議室にいる教師の数は総勢18名。つまり俺は1800問もの質問を受けることになっているのだった。

正直言つて、そこまで頑張つて教師になりたくない。

そもそも風呂目当てで受けた訳だし、そこまで深いこだわりもないのだ。

「狭間の乱が起きた年は？」

「314年」

「精霊への対価は？」

「魔力、血、生氣」

「魔獣を寄せ付けない方法は？」

「結界を張る。亜莉^{ありやそう}弥草^たを焚く」

だるい。物凄くやめたいが、陽佳^{はるか}の顔が怖くてやめられない。普段ならどんな態度でもとれるが、あの顔の時はダメだ。

いつもはたいていのことを許してくれるが（だから俺も気安く接せられる）、自分の企みを邪魔しようとする者には容赦がない。

「陽耀^{やうきよう}国の歴代の国王の名前は？」

「陽耀^{ひよう}、陽慧^{ひずい}、陽守^{ひかみ}、陽灯^{ようひ}、陽雫^{ひだ}、陽子^{ようこ}、陽高^{ようこう}、陽佳^{はるか}」

あの顔から察するに、どうやっても俺に先生になつてもらいたいようだ。

改めて、何故俺がようぐくの教師になることを望んでいるのか氣になった。魔物の話に納得はしたが……なんだか、それだけではないような氣がする。

ああ………なんか、どっちに転んでもめんどくさそうだな。

俺の眼差しの先で、陽佳^{はるか}がニヤつと一瞬笑つた顔が見えた。

嫌な予感がして周囲を見渡すと、ようぐくの教師達が苦虫を数十匹噛み潰したような顔をしているのが分かる。

これはまさか………

「1800問中1800問正解ですか」

まさか本当に答えてしまうとは。

ようぐくの学園長がそう呟いたのが聞こえた。

え〜どうやら、採用試験には受かってしまったようだ。

01：傭兵先生誕生（後書き）

おまけ

「あ、そうそう難依君」

「あ？」

「髪の毛切ったんだね。似合ってるよ」

「……いまさら」

そういうことは会った時、一番最初に言えよ。

02：傭兵先生と特別教室（前書き）

9 / 23 文を追加しました

02：傭兵先生と特別教室

「これで校舎の施設説明は以上です。何か質問はありますか？」
「肝心の特別教室はどこにあるんだ？」

一週間前、無事（？）に採用試験に合格した俺は、ようやくに来ていた。

どうやら、この一週間は俺が教師として働く準備の為の期間だったらしい。そうとも知らない俺は特に何をするでもなく日々を過ごし、今日、いつものように動きやすい傭兵服を着て学園を訪れたら滅茶めっちゃ苦茶怒鳴どなられた。

ここの教師は基本、礼服を着て授業を行っているようで、一歩間違えればただのゴロツキのような傭兵服など以ての外だそうだ。

「今更そんなことを言われたって貴族じゃないんだから礼服なんぞ持ってない」

そう言ったら、学園長が礼服を貸してやると言う。
女性である朝日あさひ学園長のものは俺がいかにも男としては細身だといつても無理があつたので、

教頭のを借りた。物凄く嫌そうな顔をされた。心外だ。

この教頭は元精霊騎士団副団長で、名を炎藍えんらんという。60を超えた

今でも背筋は真っ直ぐに伸び、キビキビとした動きをする精霊族の爺さんだ。火属性のようで、赤い髪に金の眼をしている。金の眼といっても、随分眼が細いので微かにそうと分かる程度だ。

とまあ、そんな訳で教頭の礼服を着た俺は朝日^{あさひ}学園長に校内を案内してもらっている。

「特別教室は別棟にあります」

「別棟？ほかにも校舎があるのか？」

どでかい校舎を3つも回った後だったので、まさかまだ校舎が残っているとは思わなかった。

「では、案内します。ついてきて下さい」

「・・・・・・・・」

特別教室は3つ並んだ校舎の1番後ろにひっそりと佇たたずんでいた。
他の校舎は首が痛くなるほど見上げなければならなかったのに対して、この校舎は首を曲げなくても全体を眺められるくらいだ。つまり……小さい。物凄く。

「ちつちえー」

「ここが特別教室です」

「随分こじんまりしてるなあ」

「1クラスだけですからね」

「ああ、そっぴやそうか。……ある意味豪華なのか？まるまる校舎1つが教室だったのは」

「中に入りますよう」

「おう」

無表情に近い顔をしながら先を進む学園長の後を追いつつながら、これからどうなることかと、1つ大きな溜息を吐いた

学園長の後ろを歩きながら廊下を進む。薄暗く感じるのは先入観による思い込みだろうか？

キョロキョロと初めて都会に出た田舎者のように周囲を眺めていると、妙に校舎が綺麗な事に気が付いた。

「なあ」

「なんですか？」

まったく温かみの感じない学園長の返事を気にすることなく、疑問に思ったことを尋ねる。

「この校舎、いつ頃に建てたんだ？」

学園長は記憶を辿るように眼を泳がせると、口を開いた。

「・・・3年ほど前ですね」

「・・・特別学級始めたのも、それぐらいか？」

「そうですね」

「ふーん」

結構最近からなんだなあ・・・。

陽佳の奴、なんでこんなクラス作っただんだ？

「難依先生」

ようやくが開校してから約300年。どうして今更そんな・・・？

「難依先生！！」

「え？あ、はいはい」

学園長が眉を吊り上げている。全然気付かなかった・・・。

まだ先生と呼ばれることに慣れていないせいかな、《難依先生 俺》
の公式が頭の中で出来上がっているみたいだ。

「もうすこし教師としての自覚を持って下さい」

「あゝ」

「あゝ」じゃありません！まずは言葉づかいです。そんなことじや陽耀学園の教師としてはやっていけませんよ

「まあ、だろうな」

「“でしょうね”！・・・まったく。あなたが軽く見られると
いうことは、国王陛下の威厳に傷つけるようなものですよ」

「陽佳の威厳ねえ・・・」

其処らへんの事はまったく心配してないんだけどなあ。

あいつが俺に猫かぶれって言わなかったってことは、自由にやって

くれて構わないって事だろうし。

まあ、それをこの学園長に言っても怒られるだけだろうけど。

「国王陛下を呼び捨てる事もやめてください。子ども達が真似したらどうするんですか」

「ああ、はいはい。気をつけますよ」

「とても疑わしいですけど・・・まあ、良しとしましょう」

その後、説教の様な事を言いながらも、妙に世話を焼いてくる学園長を受け流しながら廊下を進んだ。

（ていうか、特別教室遠くないか？ここそんなに広くないよな？）

「ここです」
「やつとか」

目の前の教室のプレートには『特別教室』の文字。
嫌な事をしている時は時間が経つのが遅く感じるというけど、うん。すごい精神的に疲れたな。

「ん？」

教室の扉が少し開いている。よくよく眼を凝らしてみると、とても細い糸が見えた。

「初歩的な悪戯だよなあ・・・」

「何か言いましたか？」

「いや・・・俺が先に入ってもいいか？」

「別に構いませんけど・・・？」

不思議そうな顔をしている学園長を避けて、ドアの前に立つ。

「ちょっと離れてるよ」

「え？」

ドアの窪みに手をかけ、一気に横に引く。

バツッシャアアアアン！！！！

「キャ！」

意外と可愛らしい学園長の悲鳴を聞きながら、最後に落ちてきたバケツを受け止める。

「へえ。このバケツによくこれだけの水を詰め込んだな」

片手の手のひらに載りきるくらいの小さなバケツを覗きこむ。
底にみつしりと質量魔術が組み込まれていた。

「なんだ。おちこぼれクラスつつてたけど、なかなかレベル高いじゃないか」

この『特別教室』にはレアな中級魔術を使う生徒がいるようだ。
どうしようもない生徒を集めたという『特別教室』にだ！

面白い

自分の口角が持ち上がるのが分かる。これからのことが楽しみになってきた。

未知のモノに対して好奇心が湧き上がるのは傭兵の性だ。^{さが}

「な、ななな^{ない}難依先生！」

「ん？」

「び、びしょ濡れじゃありませんか！！」

「ああ、うん」

確かに、バケツの水を浴びた俺は濡れ鼠のようになっている。あま

り気にしていなかったのだが……。
あ。そういればこれ教頭のだ。

「教頭に怒られちまう」

怒られるのはあまり好きではない。

「そ、そんなことより！誰ですか！？こんな悪戯をしたのは！！」

今更ながら自分の状態を確認しだした俺を追い越して、学園長が教室を覗きこむ。

「ははは！そいつホントに傭兵なのかよ？これくらい避けてみるよな！」

「けいた炯汰君！」

声の方に目を向けると、茶色い髪を一つに結んだ少年が翠みどりの眼を輝かせながらニヤリと笑っていた。

（なるほど。仕掛けたのはこのガキか。なら、この魔術も？）

しげしげとその少年を眺めていると、学園長がこちらを振り向いた。

「ない難依先生！」

「はいはい」

長い前髪の水を絞りながら適当に答える。水が生ぬるくなって気持ち悪くなってきた。
そろそろ払うか。

「難^{ない}依先生は先程わたくしに離れていると言いましたよね！」

「そんな大きな声を出さなくても聞こえるって」

「言いましたよね！」

「言ったよ」

黒い髪を少し乱し、黒いつぶらな瞳を吊り上げる学園長。さっきまでの無機質な態度とは大違いだ。

何をそんなに熱くなっているのか分からないが、声を荒げている学園長を見るのは結構楽しい。

「この悪戯に分かってて引かなかったんですね！？」

「悪戯つてのは引かかってなんぼだよな」

答えになっていない返事を返しながら左腕を手のひらを上にして横に伸ばす。

「ハッキリ答えて下さい！」

「言い訳するなんて、かつこ悪^{わる}い^いの！傭兵^{ようへい}つてそんなもんなのかよ」

2人がごちゃごちゃ言ってるのを無視して口を開く。

もうこの湿気には耐えられない。

「「集^つえ」」

一言呟くと身体を濡らしていた水が左手の上に集ま^あっていくのが感じられた。髪が、服が、肌が、乾いていく。

それに比例して大きくなる水の塊。最終的に人の頭3つ分くらいの大きさになった。

「こんなに詰め込んでたのか・・・」

多いとは思っていたけど、これ程とはね。

この魔術を施した相手にさらに興味が沸いた。このガキに聞けばわかるだろうか？

「「散れ」」

左手の上に浮かんでいた水がザアッと空気に溶け込んでいく。

「おい。そこの^{けいた}炯汰とかいったか？」

「！」

化け物を見たような顔をしているガキに向けて言葉をかける。

いつのまにか学園長は黙って俺の顔を見つめていた。

「このバケツの魔方阵描いたのは・・・誰だ？」

俺の顔を見たたん、^{けいた}炯汰はビクツと一歩下がった。

今の俺はそれなりに悪い顔をしているようだ。

02：傭兵先生と特別教室（後書き）

おまけ

難依「うわっ、これめっちゃ首元暑い！」

教頭「これが礼服という物だ。我慢しろ。まったく。これくらいの暑さに耐えられないとは・・・やはり傭兵という者はうんたらかなら」

難依「うーん・・・襟^{えり}立てるか。お？ちよつとマシになったかも」

学園長「・・・もう、好きにしてください。・・・
・・・さあ、行きますよ！」

礼服＝スーツもどき

03：傭兵先生と特別教室の生徒達（前書き）

ちよつとシリアス？

03：傭兵先生と特別教室の生徒達

左手にバケツを持つと、一歩進む。
それに合わせて一歩引く炯太^{けいた}。

これからしばらく教師と教え子の関係になるのに、こんなに怯えさせて良いのだろうか？と頭の片隅で思いながらも、また一歩進む。
今度は二歩引かれた。

「めんどくさいな・・・」
「は？」

呟くと同時に数歩踏み込んで、間抜け面をさらしている炯汰^{けいた}を捕まえると脇に抱えた。
手っ取り早い方法をとる。とつとところしていれば良かった。

「え？は？！」

突然のことに眼が回ったらしく、炯汰^{けいた}は翠の眼を揺らしている。
予想外に大人しい反応に気を良くしながら、これから俺が教鞭^{きょうべん}を振るう教室を眺めた。

うん。人っ子一人いねえ。なんだ、初回から生徒による新人いじりか？

・・・うん。これだと、まだ教室にいただけ炯汰^{けいた}はマシなほうでことになるのかねえ？

「誰もいないが」

「え!？」

学園長が慌てて中に入ってくる。最初の落ち着いた印象からどんどんズレていく学園長は、驚いたように目を見開きながら教室をぐるりと見渡した。

「な、なんで誰もいないの?ちゃんと知らせておいたのに!」

「俺が聞きたい」

「・・・そうですね。すみません、取り乱しました」

学園長は少し乱れた黒髪を撫でつけて整えると、ふうと大きく息を吐いた。

そして、きょんとしている炯汰^{けいた}を睨みながら口を開く。

「まったく、こんな悪戯をして!皆はどこにいるの?!」

「い、言うわけないだろ!」

「またそんなこと!」

「うるさい!っていうか、アンタも早く放せよ!」

バタバタ暴れ始めた炯汰^{けいた}を落とさないように抱え直し、気配を探る。学園長が声を上げた時、小さな空気の揺れを感じたのだ。

比較的綺麗な壁、絵本が多く入っている本棚、運動着のはみ出る口ツカー、薄汚れた床、落書きの描かれた柱、チョークの粉の残る白っぽい黒板・・・お。あれは?

「なあ、学園長。あの扉なんだ」

「は〜な〜せ〜よ〜!!人の話聞けつてば!」

「ああ。あれは仮眠室です。先生によつてはあそこで寝泊まりしてらっしゃる方もいますね」

「おい!聞こえてんだろ!」

「へえ、広いのか？」

「なあ！おい！こらっ！！」

「それなりの広さはありますよ。ベット、ソファ、小さいですがキッチンもありますし、シャワールームにクローゼットも付いています」

「降ろせよ！降ろしてクダサイ！！！」

「へえ。そこらの宿屋より設備が良いな」

「……………」

「あの部屋がどうかしたんですか？」

最終的に諦めて大人しくなった炯汰^{けいた}を抱えながら、その仮眠室に近づく。俺が何をしようとしているのか気が付いたらしい炯汰^{けいた}は、少し身体を固くした。うん。あの部屋で間違いないらしい。

「難依^{ない}先生？……え？もしかして、そこに居るんですか？」

学園長の言葉に応えることなく、件の部屋の扉の前に立った。突然静かになった教室に不安を感じているのか、気配の揺れが大きくなっている。耳を澄ますと囁くように会話しているのも分かった。

バケツをそこら辺に置き、ドアノブに手を伸ばす。すると右腕に抱えた炯汰^{けいた}が再び暴れ出した。

「別に、そんなに警戒しなくても良いと思うんだけど」

「うるさい！放せよ！！」

流石に妙な心境になってくる。なんで志願した訳でもない教師をやらされているだけなのに、ここまで邪険に扱われなければならないのか…………。

約束は守りたいと思うが、すごく疲れそうだ。主に精神が。

「ああ・・・なんでこんな面倒くさい事・・・これならケヴィク50匹に囲まれてた方が数百倍楽だ」

全身漆黒の長い毛で覆われ、鋭い赤い眼をギラギラと輝かせ、その上、鋭い牙と爪を持った人間の二倍はあるであろう巨体を思い浮かべながら眉間に皺を寄る。

暴れ続けている炯汰^{けいた}の頭を軽く叩^{はた}くと、ドアを開けた。

仮眠室に隠れていたのは男子が3人、女子が2人の計5人だった。

「………少くないか？いや、少ないよな確実に。
炯汰^{けいた}入れても6人しかないぞ。特別教室だからこんなもんなのか？
教卓に立つ学園長の隣に置いた椅子に腰掛けながら、自分の机に座
らせた生徒達を見る。いくつか空いた席があるから、これで全員
じゃないのかもしれない。」

呑気にクラスの様子を眺めていた俺とは異なり、真面目な学園長は
少し険しい顔をしながら生徒達の顔を見つめている。

「どうしてこんな事をしたの？ちゃんと説明してちょうだい」

「………」

「まさか、これまで務めていてくださった先生方にも同じ様な事を
していないでしょうね？」

「………」

まったく反応を返さない生徒達に学園長の顔がさらに険しくなる。

続けていくつか質問をするも、やはり答えは返ってこない。学園長
の顔がまた険しくなる。堂々巡りだ。

美人はなにをしても美人だと言っていたバカがいたが、今の学園長
には近づきたくない。隣にいるのが嫌になってきた。

その後も同じような質問を繰り返していたが、生徒達はいたって無
反応だ。

俺は特に興味も無かったので、この辺りで止めてもらう事にしよう。
眠くなってきた。

「黙っていても何も伝わりませんよ！誰でも良いから、な「学園長、
もうそのくらいにしとこうぜ」……邪魔しないでください」

俺が口を挟んできたことに驚いたようだったが、一瞬で元に戻った。

眉間の皺が深い。

「・・・そんなに皺寄せたら取れなくなるぞ」
「！」

学園長は、さつと両手で眉間を隠した。みるみるうちに頬が赤く染まる。

「あ、あなた、女性に対して失礼ですよ！！なんてこと言っんですか！」

「事実だろ」
「・・・！」

飛んできた拳を避けると、その腕を取り、引き寄せて肩に担いだ。

「きゃあー！！」

「・・・意外と軽いな」

「え？そつですか？」

心なしか嬉しそうに答える学園長に適当に答えながら廊下に出る。
トンつと学園長を降ろすと「じゃ」と言つて扉を閉めた。ついでに「固定せよ」と簡単な施錠をする。

「ちよつ、ちよつと！何してるんですか！？」と言つて声が聞こえたような気がしたが、気のせいだろう。ドンドンと扉を叩くような音もするがこれも気のせいだ。うん。

「はあゝダルりい」

えゝ今日は顔合わせした後、授業つってたな。鐘がなったら1限目の始まりか。

「……………1日が終わるまで、まだまだ時間がある。ありすぎる。」

「ああ、でも授業って言うよりも質問があつたらそれに答えるって形式みたいだし。」

「……………それでもめんどくさいな。さっきの魔方陣描いた奴の正体もどうでもよくなってきたし。」

「はあ」

大きく息を吐くと、背後でビクつとした反応があつた。なんだか怯えられたみたいだ。

「だらだと教卓に戻ると、椅子を引き寄せ座る。まずは自己紹介だよな。」

「話は聞いてると思うが、俺が今日からお前達の担任になる^{ない}難依だ。よろしく」

特に反応は返ってこなかった。というより、啞然とした空気が漂っている気がする。

「……………それだけ？」

燃え上がるような赤い髪をポニーテールにした茶色い瞳の少女が、思わずといったように声を漏らした。

「ほかに言う事あるか？名前だけ分かってりや十分だろ」

「いやいや！どこの常識よ？！それ！！」

「何か質問があるなら答えるけど」

「え？う、うゝん」

「ほらな。特に聞くような事ないだろ？」

「逆よ！逆！聞く事が多くて悩んでただけ！」
「しゅ、朱雫ちゃん！」

赤髪の少女・朱雫の隣に座っている黒髪黒眼の少女が、朱雫の服を引つ張りながら、焦ったように声を上げた。

「大丈夫よ、瑠維！この人から、まったくやる気感じないから！」
「まあ、否定はしないけど」
「ほら見なさい」
「朱雫ちゃん〜！」

ああいうのは見てて微笑ましいなと少しオヤジ臭い事を考える。やっぱり女がいると華があるよな。
この間の騒動では、男が数十人に対して女は由良をいれても2人しかいなかった。しかも、その由良じゃない方の女というのが、女性という枠組みに入れておくのが申し訳なく思うくらいには男らしかったもんだから、どうしようもない。

「なあ」
「ん？」
「あんた、特別教室がどんなもんか聞いてから来たのか？」

妙に真剣な顔をして聞いてくる炯汰を不審に思いながら、応える。

「はみ出し者の集まりだとは聞いたが・・・それくらいだな」
「はっ！そんな事だろうと思った！あんた、ここを不良の集まりくらいにしか思ってないんだろ？」
「いや。あんな不良はいないだろ」

瑠維という少女を指差しながら言う。指差された本人はというと、

一度ビクつと震えると朱雫の傍に寄った。

「……確かに瑠維は………って瑠維のことはいいんだよ！俺が言ってるのは「それに、お前清良族だろ？」……！！な、何言ってる」

「目を見たら分かる」

「………」

「清良族に魔人族に獣人族にと。よくこれだけ集めたよな。都心って人間族と精霊族以外は殆どいないってのに」

「……！………分かってるなら、なんで」

「は？別に……人間族以外がいるからって何か問題があるのか？」

「………ううん。ない、よ、な。うん。そうだよ……」

「お前、大丈夫か？」

ぼそぼそと何かを呟いている炯汰。何か拾い食いで了吗？

「………うん。よし。俺は清良族の炯汰だ！よろしくな！！」

「いや、知ってるけど」

「冷たい事言うなよ、センサー」

なんだか分からないが、何かを認められたようだ。満面の笑みを浮かべている。ちょっと引いた。

「あ！ちよつと、炯汰抜け駆けしないでよ！！はい！はい！私は朱雫。火系の精霊族でこのクラスのマドンナよ。よろしくね、先生！ほら！瑠維も」

「る、瑠維です。宜しくお願ひします………先生」

「ああ。よろしく」

マドンナの部分で炯汰^{けいた}が物凄く微妙な顔をしていた事には突っ込まない方がいいのだろう。

「で、先生から見て右から、頭でつかちの匡凜^{けいらん}」
「おい！」

黒髪に釣り目でメガネを掛けた少年が朱雫^{しゆな}を睨むが、そんな様子を一切無視して朱雫^{しゆな}は口を開く。

「人間族なのに魔術が使えない和巳君^{かずみ}」
「・・・・・・・・・・」

長い黒髪を一つに結んだ少年は、眼を閉じて腕を組んだまま微動だにしなかった。

魔術が使えないのによがくにいるのは、おかしくないか？其処ら辺どうなっているんだか。後で学園長にでも聞いてみるか。

「最後が鷺^{わし}の獣人の飛淵君^{ひえん}」
「・・・・・・・・・・うん」

何がうんなんだ？まあ、うん。
鷺^{わし}の獣人だと言っていたが、垂れ目の金の瞳は柔らかい。焦げ茶の髪はあちこちに跳ねている。くせ毛なのだろうか？

「以上！現在のクラスメートでした！」
「現在の？」
「そう！このクラスって生徒の入れ替わりが早いよね。ちなみに一番長くいるのが私！分からない事は私に聞いてちょうだい！」
「ああ。そうさせてもらう」

「センサー！俺にも聞いていいからな！」

「え？」

「え？センサーその反応どついう意味・・・」

「ここでちょうど1限目が始まる鐘の音が鳴った。」

03：傭兵先生と特別教室の生徒達（後書き）

おまけ

朱「炯汰は清良族だからここに来たって言うけど、私は頭が悪過ぎてここに入れられたと思うの」

炯「おい！失礼なこと言うなよ！」

朱「この前のテストでこの子オールケタ取ったのよ」

炯「ちょ！お前やめろよ！」

儼「ああ、うん。初めて会った時から、そんなだろうなと思ってた」

朱「やっぱりそういうのって分かっちゃうのね」

儼「無自覚だろうけど、馬鹿オーラ出してたからな」

朱「あはは！馬鹿オーラ！！」

瑠「あ、あの、そのくらいで止めてあげて？炯汰君泣いてる・・・」

炯「泣いてねえよ！バツキヤロウ！！うわあああああ！！！」

瑠「あ、走って行っちゃった」

儼「からかい過ぎたか？」

朱「大丈夫。明日には忘れてるから」

瑠（可哀そうな炯汰君・・・）

04：傭兵先生のはじめての授業

ゴオオオオオン

ゴオオオオオオン

STの終了と授業の始まりを告げる鐘が響いた。

これから初授業となるわけだが、よく要領が分からない。まあ、おい慣れていけば良いか。期限は1年以上ある訳だし。・・・
憂鬱だ。

特別教室。略して特教（俺考案）の生徒達はそれぞれ別の教本やノートを取り出して思い思いに勉強している。

朱雫と瑠維が教本を覗きこみながら話しているが、授業中の私語を

たしな
窺める気は無い。1つの事に関してそれぞれの意見を話し合うのは
良い事だと思うし、俺もそうやって学んできた。

「……………それにしても、いいのかコレ。」

仮にもこの世界で唯一の国立魔法学校だつてのに、これじゃあ殆ど
独学と変わらないんじゃないか？いいのか？

俺も学校に通つてたわけじゃないからハッキリしたことは言えない
が、ダメ、だよなあ。

しかも、特教は学年がバラバラだから授業なんてするだけ無駄だ。
ひとりひとり教えていけつて？キツイだろ。…………俺もちよつと昔
の復習しとくか。

これからのことを考えると自然と眉間に皺が寄り、溜息が零れる。
はるか
陽佳の野郎…………面倒事押しつけやがつて。

「センサー！」

「ん？なんだ」

「ここ！わかんねえ。教えて」

「どれどれ…………」

炯汰^{けいた}が持ってきた教本を覗きこむ。

そこに書かれていたのは精霊魔法の基礎だった。

「お前、今何歳？」

「え？12歳だけど」

「ふゝん。これ使えんの？」

「？うん。初級なら」

「ふんふん」

俺が覚えた時よりも6、7年遅いな。このペースが普通なのか。

「で、使えるのに何が分からないんだ？」

「これこれ！この精霊とコミュニケーション取る為の精霊語ってやつ」

突然の俺の質問を気にした様子もなく炯汰^{けいた}が指差したのは精霊語の簡易表だった。

精霊語とは人間族が魔力を報酬に精霊の力を借りつける時に使う言葉の一つで、主に精霊に対する感謝や褒め言葉を表す。

精霊魔法の手順は

？魔法の属性を決める言葉

？どういった現象を起こしたいのかという要望

？魔力を放出

？精霊が魔力を受け取り、力を行使

？精霊語（言葉でも文章でも可）で感謝を述べる

となっていて、？以外は標準語で行える。

最後の精霊語での感謝は初級程度なら特に必要ないのだが、高度が上がるにつれてアフターケアとして重要になってくる。

人間族側の考えは置いておくとして、精霊から見れば『人間＜精霊』の方式が（精霊族以外は）当然であり、魔力を献上してくるから、その報酬として力を貸してやっているだけなのである。

よって片手間ですむ初級魔法とは違い、それなりに力を入れなければならぬ上級にもなると魔力だけでは不満をもつ精霊が稀に現れる。

そこで彼らが使う精霊語によって感謝や尊敬を表し、精霊を持ちあげる事によって満足させる。言わなくても魔法は使えるが、後々のことを考えると言わない方が損なのだ。精霊は人間の事を必要とは思っていない。

精霊によつては、その言葉を聞くために張りきって力を振るってくれる者も稀にいる。

ちなみに、火精霊に多い。

「まあ確かに難解だとは思いつけど　ありがとう　くらいは言えるだろうっ？」

「え？センサー、今なんて言ったの」

予想以上に炯汰けいたの頭は悪いようだ。　ありがとう　くらい言えなくてどうする……基本の基本だぞ、おい。

「……よし。お前ちよつと其処に座れ」

教卓の真ん前の席を指すと羊皮紙とインクを用意し、そこに ありがとう と書く。

大人しく席に着いた炯汰^{けいた}に文字が書かれた紙を見せながら問う。

「これ読めるか？」

「ありがとう」

「………ん？」

即座に返してきた炯汰^{けいた}の顔をまじまじと見つめる。

俺の視線に首を傾げる炯汰^{けいた}にちよつとイラつとしてから、また別の言葉を書いて見せる。

助かりました

「助かりました」

素晴らしい

「素晴らしい」

美しい

「美しい」

輝く炎が月夜に映える

「輝く炎が月夜に映える」

………こいつ。読むぶんに関しては単語力も文法も完璧なんじゃないか？

確か俺が持つてる本の中に精霊語で書かれた本があった筈だ。持つ

てくるか。

「お前、精霊語できるじゃないか」

「えー？でも発音はさっぱりだし」

「それだけ読めりゃ十分だ。もしかして、精霊語書けるんじゃないか？」

「書けるよ。俺、発音さっぱりだったから・・・せめて読めて書けるようにって練習したし」

「ちよつと俺が今から言う言葉書いてみる」

「うん」

さつきとは異なる単語と文章をいくつか言つと、けいた炯汰の羽ペン躊躇なくサラサラと滑っていく。

「全部あつてな」

12歳にして精霊語をここまで正確に書けるのはほとんどあり得ない。それだけけいた炯汰が努力したつてことの証明だろうが、これは良い意味で予想外だ。

「けいた炯汰。お前はそのまま精霊語を書く事を練習しろ」

「は？でも、発音しないと魔法使えないじゃん」

「は？発音しなくても、書ければ使えるだろ」

「？」

「？」

なんだ、ここでは声に出さないといけないことになってるのか？

発音したほうが効率は良いが、魔力を染み込ませたインクで紙に書いたものでも効果は変わらない筈だぞ？

どうも“ようがく”と俺の常識はずれているようだ。

「発音しなくても良いの？」

「良いだろ？」

「……俺、聞いたことない」

「俺の先生が言ってたし、実践してたから間違いない」

「センサーのセンサー？」

「おう」

「センサーにセンサーっているんだ」

「そりゃいるだろ。本だけで学ぶには限度がある」

当たり前のことを聞いてくる炯汰^{けいた}。俺をなんだと思ってるんだ？

「だってセンサー傭兵なんですよ？」

「……ああ、そういうことか」

確かに傭兵は先生に付いて勉強したりしないもんなあ。

「ま、そういう変わり種もいるんだよ」

「ふん」

頷きながら不思議そうにコツチを見てくる翠の眼に苦笑を返してから「他に質問ないなら戻れよ」と声をかけた。

「うん。とにかく書く練習しとけば良いんだよね？」

「ああ。明日、見本見せてやるよ」

「え？ホントに！？わかった！！」

元気に自分の席に戻っていく背中を見送ると、窓の外を眺めた。
空は晴天。むかつくほど綺麗な青空だ。

もっちょっと、頑張ってみようか

04：傭兵先生のはじめての授業（後書き）

難依「炯汰は歳のわりに、言動が幼いよな」

炯汰「えゝ？ そんなことないよ。こんなもんだって」

難依「いや。俺はもうちょっと落ち着いてた」

炯汰「センサーの小さい頃って、どんなだったの？！」

難依「それはこれからのお楽しみだ」

炯汰「何それ。つまんねえーの」

05：傭兵先生と小さな同居人

その後。

炯汰けいたと朱雫しゆながたまに質問しに来るくらいで、何事もなく1日目終了。

警戒されてるみたいだから、しょうがないわな。

雰囲気的に過去のご教授方に対して色々と思うところがあるみたいだし。何やらかしたのか知らないが、俺に迷惑掛けるのはやめてほしいなあ・・・。

まあ、とにかく、仲良く勉強つてのはまだまだ無理だろう。

生徒達の仲が良かったってだけで善しとするか。子どもの喧嘩の仲間なんて真っ平御免だ！

俺が今いるのはようがくに最も近い位置にある商店街だ。日和会ひよりかいという名の商會が取り仕切っているので、日和街ひよりがいとも呼ばれる。

新鮮な果物や野菜を見つけては購入。薬屋を覗いて香辛料を、パン屋では2、3週間分の食パンを仕入れていく。日用品や台所用品も買って財布がかなり薄くなってしまった。

食材や雑貨で重くなった袋を担ぎながら、最後に装飾店すらんに入った。

ここで一つ問題が発生した。

（ああ、しまった。ここ来てから買えばよかった）

すずらんの入り口を通れずに引っかけた袋をしばらく見つめる。
なんだか凄く間抜けだ。

（そういえば、自分で買い出しに行くの久々だったからなあ。ここんところ買い出しは由良ゆらに任せてたし）

仲間の少女の顔を思い浮かべながら思う。

おっとりとした外見に反して、値引きに関しては歴戦の商売人達から恐れられる程の技量をもっている、俺達の傭兵団の優秀な財政担

当者だ。

由良のおかげで、少し財布に余裕ができた。有難い存在である。

さすがに俺個人の依頼（？）の為の買い出しを由良に任せようなんて事はしない。こんな事で一々由良の手を煩わせられないし、年上の男としてのプライドもある。

・・・久しぶりに初心を思い出せて良いか。

玲愛^{れあ}に出会って、由良^{ゆら}が仲間になってから、1人になることが無かったから、なんだか新鮮だ。

そう考えると気分が良くなってきた。

袋は相変わらず引つかかっているが。

「・・・・・・・・明日、出直してくるか」

無理に袋を引っ張ることはせずに、押し戻して店を出る。そもそも安い礼服がないか覗いてみようと思っただけで、服は持っているのだ。

恥ずかしいから店員が寄ってくる前に逃げよう。

「よつとー」

袋を担ぎ直すと、真っ直ぐようがくに戻った。

「……………なんでお前いるの？」
「……………」

俺の目の前で困ったように微笑んでいるのは、どこからどう見ても
今日から俺の生徒になった鷺^{わし}の獣人の飛淵^{ひえん}だった。

ここは特教に付属している教師用の仮眠室。

これから此処で寝泊まりしようと思い出しに行ってきたわけだが、
帰ってきたら何故か飛淵^{ひえん}がソファでくつろいでいたのだ。

「生徒って学校が終わったら、とっとと家に帰るもんだと思ってた
けど」

「……………うん。ぼくね、住んでるの」
「……………ここに？」

「そう。お家がちょっと、遠くて」

「ふーん？お前の家族、何処に住んでんだ？」

「朱雀^{すざく}様の山だよ」

「へえ、炎山^{えんざん}か。確かに遠いな」

遙か昔。まだ神が地上に存在した頃に、その守護聖獣の1人 朱雀が舞い降り、住処とした山として有名である。そこから、朱雀の特徴に準^{なづか}えて炎山と呼ばれている。
国家公認の聖地の1つだ。

ようがくから、その炎山には馬車で片道1、2週間かかってしまう。

「で、ここに住んでるわけだ」

「うん」

生徒たちから感じる今までの教師陣のイメージからして、この仮眠室を愛用していたとは考えられない。

水道、ガス、電気がタダな上に、家具がある程度揃っている。もちろん家賃はない。

お金のない学生からしたら、これ以上ない程の最良物件だろう。

「飯とかはどうしてるんだ？」

「親がね、お金を送ってくれてるから」

「外食してるのか？」

「うーん……たまに。ほとんど自分で……あんまり好きじゃないけど」

「ふーん……実はな、俺は今日から此処に住もうと思ってるんだ」

「・・・出てったほうがいい?」

「それだと、俺の後味が悪い。だから」

「だから?」

「俺と取引しよう」

・仕事分け

難依ない：食事の準備、戸締り

飛淵ひえん：洗濯全般

共同：掃除、食後の後片付け、買い出し

問題が発生したら、その時考える。臨機応変で。

・寝る場所

難依ない：ベット

飛淵ひえん：ソファ―（飛淵ひえんが寝転んでも余裕の大きさだったから問題無し）

飛淵^{ひえん}が親から受けつつっているお金を家賃として難^{ない}依に渡す（親の了解を得てから）。

そのかわり、食費も生活費も一切払わなくて良しとする。

お小遣いは1月1000圓^{えん}。

「これでいいか？」

「うん・・・ぼく、洗濯は得意」

「よし。まかせたぞ」

「うん」

にこにこ笑う飛淵^{ひえん}の癖っ毛を掻き撫でる。

（初めて見た時から思ってたけど、こいつかなり癒し系だな）

「これからよろしく、飛淵^{ひえん}」

「うん・・・・・・・・・・よろしくね、先生」

「よし！何食べたい？記念に好きなモノ作ってやるよ」

「！ぼく、シチューがいい」

「わかった。ちよっと待ってるよ」

確かシチュー^{にんじん}のルーは買ってたよな。

さっそく人参^{にんじん}の皮むきから取りかかるう。

教師生活初日。小さな同居人が出来た。

05：傭兵先生と小さな同居人（後書き）

飛「・・・おいしい」

雛「そーだろうそーだろう」

飛「先生、料理、上手なんだね」

雛「まあな。ガキの頃から炊事洗濯は自分でやってたから」

飛「すごいねえ」

雛「お前・・・なんかホント癒されるなあ。今までに出会ったことないタイプだ」

わしゃわしゃ

飛「・・・先生、髪・・・ぼさぼさ、なる」

雛「けっこう柔らかい髪してるよな」

わしゃわしゃ

飛「・・・」

どうも飛淵は雛依の父性本能（？）をくすぐるようです。

話の中に出てきた雛^{えん}は、そのまま円と同じだと思って下さい。

06：傭兵先生のささやかな決意

飯を食べ終わった後、家に飛んで帰って精霊語で書かれた本と、インクを取りに行った。

ようがくから我が家までは徒歩で片道3時間かかる。さすがにそんな時間がかかると困るから、文字通り飛んで行った。

夜の風をきる感覚は気持ちが良い。大きく息を吸って吐くと、身体の中から浄化されていっているような気がする。

暑い夏を過ぎ、秋に片足を突っ込んだ今の時期は、夜になるのが早い。

ようがくを出た時はまだ明るかったのに、戻ると5歩先も見えないような暗闇に包まれている。結局、徒歩で行った時とたいして変わらない時間に仮眠室に着いた。

家に入ったとたん、玲愛に捕まり、由良にお茶を出されて、なかなか出られなかったのだ。

部屋に戻ると、飛淵は、ソファアの上で丸くなっていた。

ずり落ちそうになっている毛布を掛け直してやりながら、妙な感覚に襲われる。

（なんか、小さい子どもを深夜まで置き去りにしてしまったような罪悪感が・・・）

今まで、こうして一人で暮らしてきたんだから、飛淵ひえんは何とも思っていないだろう。だけど、こんな小さい子ども（炯汰けいたよりは確実に小さい）が一人暮らしするのは・・・なんだかなあ。

「はあ、あーあ・・・」

ソファアの傍にしゃがみこんで、飛淵ひえんの髪を撫でる。うむ。良い手触りだ。

（ま、考えたって仕方ないし。俺もとっととシャワー浴びて寝よ）

最後にもう一度飛淵ひえんの髪を撫でると、シャワールームに向かった。

「よし！やるか」
「おう！」

教師生活2日目。

今は3限目の実技授業だ。

昨日した約束通り、文字を使った精霊魔術の手本を見せるために校庭に出ていた。

ちなみに、朱雫^{しゆな}は端の方で火の玉をいくつも浮かべていて、その左では、匡凜^{こうりん}が地面に座って何かを書き殴っている。さらに距離をおいた左側には、和巳^{かずみ}が刀を手に座禅を組み、精神統一を行っていた。

（へえ・・・刀か。珍しいな）

レイピアのような両刃剣が主流のこの時代に、刀なんてそうそう見る機会はない。

（あれ？そういうば、刀を主とした流派があったような・・・）

「センサーー!!」

「・・・ん？」

「なあに、ぼーっとしてんだよー!早く見せて!」

「わかったわかった。目えかつぽじって良く見てろよ」

「か、かつぽ・・・じって?」

「そこは気にしないで良い。ちゃんと見てろよ」

「おう!」

目をキラキラ輝かしている炯汰^{けいた}にちよつと苦笑して、ズボンのポケットから ありがとう。感謝します と書かれた紙を取り出す。

あ。ちなみに今日の服は礼服じゃない。かといって、傭兵服でもないが。

今来ているのは、麻の少しくすんだ白い長袖のシャツに袖のない革の上着を羽織り、黒い長ズボンを穿^はいている。一般的な普段着だ。

今日の朝、学園長によくよく聞いてみると、礼服よりも私服で授業を行っている教師の方が多いらしい。真面目な学園長は、たとえばともな服を着ていたとしても不満らしいが、渋々目を瞑っているようだ。ちなみに傭兵服は許容範囲外だとさ。残念。

「これが昨日言ってた、魔力を注いだインクで書かいた精霊語な。ちなみに何て書いてあるでしょう?」

「ありがとうございます!」

「よろしい・・・が、あんまり大声で叫ぶな。妙な注目浴びるだろうが」

翼を広げて青空をスイスイ飛んでいた飛淵^{ひえん}が、心配したように俺達の頭上をぐるぐると旋回し始めたのだ。朱雫^{しゆな}と匡凜^{かうりん}がこちらを盗み見ているのも感じる。和巳^{かずみ}はビクともしていないが。

「はい」

「本当にわかってんのか？」

「大丈夫だって！」

「よし。次、無駄な大声上げたら拳骨一回な」

「ええ！？なにそれ！！」

「続きな」。最後以外は同じだから飛ばすぞ」

「無視っ！？」

「頼んだ」

くすくす

たのんだですって

ふふふ

まかせて

まかせて

なんだってかなえてあげる

なんでもいって

くすくすくす

「今、センサーなんて・・・？」

「赤の使者よ 集いて 天を焦がせ」

言い終わると同時に、俺と炯汰けいたの前に俺の身長身長の2倍程の火柱が燃え上がった。

「わ！」

驚いて一歩引いた炯汰けいたに呆れる。

（こいつも火の精霊魔術を使う癖に、これぐらいでビビってどつするんだ、まったく）

一瞬のうちに聳そびえ立った火柱は、数十秒間燃え続けると、瞬く間に消えていった。

「で、ここで紙を投げる」

なにも無くなった空間に向けて、 ありがとう。感謝します と書かれた紙を放る。

ヒラヒラと揺れながら浮かんだ紙は、何事もなく地面に落ちた。

「え？そんだけ？何もなつてないじゃん！」

「どんな派手なの期待してたのか知らないが、これで終わりだ」

「え」

「そんなに不満なら、紙を拾って見てみる」

「紙？」

地面に落ちている紙を不審そうに眺めた炯汰けいたは、そろそろ手を伸ばした。ちよんちよん紙を突ついているが、当然なんの反応もない。意を決したように素早く紙を拾い上げる様子に、何を大げさな思っただのは内緒だ。

紙を裏表と交互に見た炯汰けいたの目が、大きく見開かれた。

「……っ文字が消えてる！！」

その言葉の通り、白い紙にはインクのシミ一つ残っていないかった。

「精霊が言葉を受け取った証拠だ。おもしろいだろう？」

「うん。・・・うん！これ、俺も出来るんだよね！？」

「ああ。インクに魔力込められるようになったら簡単だ」

「教えて！」

その後、そのまま特別なインクの作り方に全ての時間を使ってしまっていた。

まだ2日しか経っていないが、けいた炯汰の傾向は大方理解できた。好きな事にはとことん集中できるが、他が駄目駄目なタイプだ。

俺的には1つの事を突き詰めていくのは良い事だと思うが、社会では不利だろうな。しかもけいた炯汰は清良族だし。色々これから苦労することになるだろう。

真剣な顔でインク壺を見つめているけいた炯汰を見る。

（ま、此处で会ったのも何かの縁だろ。何か問題が起きたら手え貸してやるか）

なんてことを思ったのは、たぶん、初めて懐いた生徒だから情に流されたんだろう。

という事にしておこう。

06：傭兵先生のささやかな決意（後書き）

難「なかなか覚えが早いな」

炯「ほんと！？やった！」

難「あ、おい。氣い抜くと・・・・・・・・」

炯「え？」

バアアアアアン！

炯「ぎゃあああああ！爆発したあ！！」

難「魔力を注ぎ込み過ぎると弾け飛ぶから氣をつけるよ」

炯「言うの遅い！って、センサーなんでそんな遠くにいんの！？」

難「俺がそんな間抜けな事に巻き込まれると思ってるのか？」

炯「ううう・・・・・・・・！」

と「」は違う言語です

タイトルを「傭兵先生」に統一しました（11・3・20）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4566n/>

傭兵先生

2011年10月6日00時53分発行